

Title	交換される肉体 : 死を恐怖する『夏の夜の夢』『尺には尺を』、死に魅入られる『十二夜』
Author(s)	三浦, 誉史加
Citation	Osaka Literary Review. 1998, 37, p. 41-50
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25362
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

交換される肉体 — 死を恐怖する『夏の夜の夢』 『尺には尺を』、死に魅入られる『十二夜』

三 浦 誉史加

Shakespeare 作 *Measure for Measure* (MM) 中で用いられる仕掛けにいわゆる bed trick がある。意に染まぬ男の求愛から逃れようとする女が、闇夜に紛れて代わりの女を男のもとに送り出し、男はその女を求愛した女だと思い込んで一夜を共にする。少なからぬ数の観客が、愛した女との区別もつかないのかと疑問に思うことだろう。男にとって大事であったはずの女が、別の女と同質、交換可能な肉体となってしまうのである。別個であるはずの二つの肉体が交換可能であることは、ある種の不快感を誘う。本論ではこの不快感の源は一体何であるのかを明らかにして行きたい。

I

上記で見た交換される肉体は、シチュエーションは異なっても、MM 以外の劇中にも見ることができる。A *Midsummer Night's Dream* (MND) をその例として見ていこう。父親に結婚を反対された Hermia と Lysander は、駆け落ちしようと妖精の棲む森で落ち合う。Hermia を一方的に愛する Demetrius と、彼を愛する Helena も共に彼らを追って森へ向かう。そこで Demetrius と Lysander は、妖精 Puck が目に塗り付けた薬のせいで Helena を愛するようになってしまう。Hermia と Helena の立場が入れ替わってしまうのだ。ちょうど彼女たちの肉体が交換されたかっこうになるわけである。女性たちの肉体が交換可能になってしまった事を示す科白がある。Helena を熱心に口説き始めた Lysander に向かって彼女はこんな皮肉をぶつける。

Helena. Your vows to her [Hermia] and me, put in two
scales,
Will even weigh; and both as light as tales.
(3.2.132-33)

交換可能な肉体となった女性たちに捧げられる誓いは、どちらも同じ交換可能な重さというわけである。

Lysander の愛を失った Hermia は悲嘆に暮れる。Demetrius の愛を得られて喜ぶべき筈の Helena も、男たちが偽りを言って自分をなぶりものにしていて思い込んで激怒する。どちらの女性にとっても、肉体が交換可能となることは回避すべき状態なのである。結局、Puck が再び男たちに塗り付けた薬のお蔭で、Lysander は Hermia を元のように愛するようになり、二組のカップルが結婚することで、肉体の交換可能性はほぼ解消される。

MND においては、肉体を交換可能にしたのは、人間の手の及ばない魔法の力であり、しかもその交換可能性はほぼ解消するため、交換される肉体に対する恐怖は和らげられると言ってよい。ところが、*MM* 中に見られる肉体の交換は、魔法によってではなく人間の世界である「現実」を舞台にして起こっており、この交換が解消しないまま幕を閉じるため、恐怖感はいずれより強く打ち出されている。*MND* では交換可能な肉体にされ、恐怖感を抱いたのは口説かれる女性側であった。*MM* では、恐怖感を覚えるのは口説かれる女性には違いないが、交換可能な肉体となるのはむしろ口説く男性側となることが多い。それを詳しく見てみることにしよう。公爵は、Vienna を離れたと見せかけ、公爵代理を任せた厳格な Angelo が厳しく法を適用し、Vienna に秩序を取り戻す様子を密かに観察しようと、修道士に変装する。Angelo は、長年執行されずにいた法律を復活させ、そのために、婚約者を妊娠させた Claudio は死刑を宣告される。彼の妹 Isabella は Angelo のもとへ出向き助命嘆願をする。

If he [Claudio] had been as you, and you as he,
You would have slipp'd like him. . . . (2.2.64-65)

. . . Go to your bosom,
Knock there, and ask your heart what it doth know
That's like my brother's fault. If it confess
A natural guiltiness, such as is his,
Let it not sound a thought upon your tongue
Against my brother's life. (2.2.137-42)

彼女は Angelo も兄と同じ過ちを犯し得る人間ではないかと繰り返し問いかける。彼女にとっては、二人とも「同じ罪の心」を持った、交換可能な人間であり得るのだ。この言葉に刺激されるかのように、Angelo は彼女に性欲を持ち始める。*MND* においては、Puck によって塗り付けられた薬が男達の性欲を拡大させ、女性たちの肉体が交換される事態が起こった。一方 *MM* においては、Angelo は、Isabella に兄と交換可能な肉体として扱われてから彼女に性欲を持ち始める。性欲が肉体の交換可能性を生むばかりでなく、その逆もあり得ると言えよう。両者は互いを刺激し合う要素と言える。

Angelo は、Claudio の助命と引き換えに、Isabella の体を要求する。彼女は激しく拒絶し、貞節を汚す位なら兄は潔く死ぬべきだと言い切る。彼女は先に見たように、Angelo と兄を重ねて見る発言を繰り返しており、彼らを交換可能な肉体として捉えている。その時点では、彼女は Angelo に恐怖心を抱いていなかったのだが、この肉体が性欲をもって彼女に迫ると、彼女に恐怖心が生まれたのである。交換される肉体と性欲、この二つの要素が揃って初めて嫌悪感が生じてくるのである。彼女が Angelo を、兄と交換可能な肉体として彼女に迫ってきていることに嫌悪を感じている事が分かる箇所がある。Angelo の要求に従うように言う兄に彼女が怒りをぶつけるシーンである。

Wilt thou be made a man out of my vice?

Is't not a kind of incest, to take life
From thine own sister's shame? (3. 1. 136-39)

Angelo を、兄と区別のつかない、性欲を彼女に向ける人間として意識している彼女は、兄を助けるために Angelo と関係することを「近親相姦」と感じ、忌まわしく感じるのである。途方に暮れる Isabella の前に、修道士に変装し、Angelo の統治ぶりをつぶさに観察する公爵が現れ、Angelo の不正を阻止・暴露するため助力を申し出る。彼は Angelo の要求を呑んで彼に身を任せるふりをするよう Isabella に指示し、昔 Angelo に捨てられた Mariana が Isabella に成り済まして Angelo と関係を持たせるよう画策する。修道士という役職上、公爵はしばしば“father”と呼ばれるのだが、“Bed Tricks: On Marriage as the End of Comedy in *All's Well That Ends Well* and *Measure for Measure*”において Janet Adelman は、公爵は Isabella に対しては、「性欲を持たない父親」(“asexual father”) 的な保護者として「Isabella を sexuality から守る」(“has protected Isabella from sexuality” [171]) 者として機能していると分析する。子供を守り、指導する“father”として公爵が機能していることは終幕において強調される。公衆の面前で Isabella や Mariana がどんなに姦淫の罪を糾弾しても、Angelo は罪を認めようとしなない。しかし、公爵が修道士の頭巾を脱ぎ捨て正体を現すや否や、Angelo は恥じ入って罪を認めるのである。公爵は、無力な子供 Isabella を守る“father”なのだ。しかし、Isabella を sexuality から守る“father”であったはずの公爵は、最後の最後に Isabella に結婚を要求し、Adelman が指摘するように、Isabella に性欲を持つものとして Angelo と同一化する (171)。公爵の結婚の申し込みに対し、Isabella が沈黙を守ったまま劇は終わりをむかえる。この沈黙は、承諾の沈黙ではなく、性欲を持った交換可能な肉体へと変貌した公爵への無言の抵抗であろう。

II

両劇いずれにおいても、性欲と結び付いた肉体の交換可能性は恐怖を呼び起こした。この恐怖は何ゆえ生み出されるのだろうか。この問いに対する答えは *MM* に表れている。公爵は、Claudio の処刑を急ぐ Angelo をごまかそうと、反抗的な囚人 Barnardine の首を Claudio の首として Angelo に差し出すよう指示する。Angelo は二人とも見知っているため、別人の首だとばれてしまうと心配する典獄に対し、公爵は “O, death’s a great disguiser” (4.2.172-74) と答える。死によって人の顔の見分けがつかなくなるというわけだ。この試みは中断されるが、結局熱病で死んだ別の囚人 Ragozine の首を代わりに Angelo に届ける。

Provost. . . . Ragozine, a most notorious pirate,
 A man of Claudio’s years; his beard and head
 Just of his colour. What if we do omit
 This reprobate [Barnardine] till he were well
inclin’d,
 And satisfy the deputy with the visage
 Of Ragozine, more like to Claudio? (4.3.70-75)

Robert. N. Watson は “False Immortality in *Measure for Measure*: Comic Means, Tragic Ends” において、Claudio の首は、様々な死人の首と交換可能であることを強調することで「あらゆる人間の肉体は死ねば恐ろしい位同質化してしまうもの」(“in decay all human bodies reveal their horrible sameness” [429]) であることを表すと指摘する。つまり、全ての肉体は死によってどれも同じで交換可能な状態となるのだ。死んで全てが区別のつかない同じものになることへの人間の恐れを公爵が表現している。

. . . yet death we fear
 That makes these odds all even. (3.1.40-41)

先程まで述べてきた交換される肉体は、それをつくる死を連想させる故に脅威となるのである。死と肉体の交換可能性が結び付くことを示すエピソードが4幕2場にある。死刑執行の際の役人の手が足りないため、女郎屋をしたために逮捕されていた Pompey が臨時に首切り役人となるはめになるのである。非合法的な商売をしていた男が、死を与える合法的な首切り役人と交換可能になってしまうのだ。

I の中で、*MM* の分析に見たように、肉体の交換性は性欲と結び付いて初めて恐怖を呼び起こした。性交は伝統的に death と結び付けて考えられていた。性欲には、肉体の交換可能性を死によるそれに近づけるものがあるのではないだろうか。

性欲と結び付く肉体の交換可能性が死を連想させることは、*MND* からもうかがえる。Puck の塗り付けた薬のせいで Lysander が Helena を口説き始めたころ、Hermia が眠りから目を覚ましてこう言う。

Hermia. ... What a dream was here!
Lysander, look how I do quake with fear.
Methought a serpent eat my heart away,
And you sat smiling at his cruel prey.
(2. 2. 147-50)

Helena と Hermia の肉体が交換可能になってしまったことを予感したかのよう、その交換可能性が連想させる死に自分が見舞われる夢を見たのである。これを回避すべく Puck の薬が再登場するわけであるが、魔法で交換可能性を解消するだけでは不足だとばかりに、交換される肉体が連想させる死のイメージを無効にしようとする作業がしつこいばかりに行われる。それは、村人たちが 大公 Theseus と Hippolyta の結婚式に捧げる狂言の稽古場面によくあらわれている。狂言の内容は、恋人がライオンに殺されたと勘違いした男が自殺し、それを見た恋人も悲観して死んでしまうという内容なのだが、ご婦人方がこわがるからライオン役は小さく吠えようとか、ライオ

ン役は本当は人間がしているのだということが分かるようにしようとか、徹底的に劇のリアリティーの骨抜きが行われる。さらに、自殺シーンもご婦人方が怖がるのではないかという意見に対し、Bottom はこう答える。

Bottom. . . . let the prologue seem to say we
will do no harm with our swords, and that Pyramus is
not kill'd indeed; and for the more better assurance, tell
them that I Pyramus am not Pyramus but Bottom the
weaver.
This will put them out of fear. (3.1.16-20)

狂言中の死をこれはフィクションだとわざわざ断って無効にすることで、死のイメージを払拭しようとしている。こうすることで、*MND* 中に現れる死を連想させる肉体の交換可能性をも回避しようとする作業なのである。

III

立場に逆転はあるものの、両劇とも肉体が交換されることは回避されるべきであるという姿勢を取っていることには変わらない。ところが、*Twelfth Night* (*TN*) は、この肉体の交換可能性（ここでは口説かれる側の）を受け入れてしまう。男装した Viola と生き別れになっていた兄 Sebastian が鉢合わせしたシーンでは、まるで同一人物が二人いる錯覚を起こしたかのような科白が溢れる。当の本人さえも混乱するほどである。

Duke. One face, one voice, one habit, and two persons!
A natural perspective, that is, and is not!

Antonio. How have you made division of yourself?
An apple cleft in two is not more twin
Than these two creatures. Which is Sebastian ?

Sebastian. Do I stand there ? (5.1.214-24)

Olivia は、男装した Viola にあれほど恋い焦がれていたにもかかわらず、Viola が女性であることが判明し、兄 Sebastian が現れるや否や あっさりと兄との結婚を承諾する。Viola と兄とは、人格は全く異なるにもかかわらず、Olivia にとっては二人は交換可能な肉体となるのである。一方、Olivia に恋した Sebastian もこれを喜んで受け入れる。彼女との結婚に喜ぶ彼には、妹との肉体の交換可能性を受け入れたような科白が見られるのである。

Sebastian. So comes it, lady, you have been mistook.

.....
You would have been contracted to a maid;
Nor are you therein, by my life, deceiv'd:
You are betroth'd to a maid and man.

(5. 1. 257-61)

II で見てきたように、交換可能な肉体への恐怖は死への恐怖であるとするれば、交換される肉体に恐怖を覚えず喜んで受け入れる TN は死に魅入られていると言えるのではないだろうか。TN は一見のどかな love comedy に見える。しかしそこではふとした瞬間に死の影が不気味に旋律を奏で始めるのである。Orsino は、Olivia を思う苦しさを紛らわせようと、道化に歌を歌わせる。

Come away, come away death,
And in sad cypress let me be laid,
Fie away, fie away breath,
I am slain by a fair cruel maid:
My shroud of white, stuck all with yew,
O prepare it,
My part of death no one so true
Did share it.

Not a flower, not a flower sweet,
On my black coffin let there be strown:
Not a friend, not a friend greet

My poor corpse, where my bones shall be thrown:
 A thousand thousand sighs to save,
 Lay me, O where
 Sad true lover never find my grave,
 To weep there. (2.4.51-66)

つれない女に恋い焦がれる男が死をも口にする構図は当時の恋物語のお決まりのパターンであり、この歌を真に受ける必要はないのかもしれない。しかし、最後に二組のカップルの幸せな結婚で幕が閉じられる間際になって、道化がこんな歌を歌う。

When that I was and a little tiny boy,
 With hey, ho, the wind and the rain,
 A foolish thing was but a toy,
 For the rain it raineth every day.

But when I came to man's estate,
 With hey, ho, the wind and the rain,
 'Gainst knaves and thieves men shut their gate,
 For the rain it raineth every day.

But when I came, alas, to wive,
 With hey, ho, the wind and the rain,
 By swaggering could I never thrive,
 For the rain it raineth every day.

But when I came unto my beds,
 With hey, ho, the wind and the rain,
 With toss-pots still 'had drunken heads,
 For the rain it raineth every day.

A great while ago the world begun,
 With hey, ho, the wind and the rain,
 But that's all one, our play is done,
 And we'll strive to please you every day. (5.1.388-407)

ハッピーエンドにはあまりにも似つかわしくない、死を予感させる歌である。恋人たちは恋に夢中で、肉体の交換可能性を受け入れることに潜む死への指向性に無自覚である。これらの歌を歌うのはいずれも道化である。唯一道化のみが、恋人たちの選択に潜む危険性に気付いているのだ。機知に富んだ明るい科白が飛び交う中にポツンポツンとこうした歌を差し挟むことで、道化は静かに警告を発しているのだ。TN は、問題劇と言われる MM よりも遥かに問題作であると言えるのである。

Works Cited

- Adelman, Janet. "Bed Tricks: On Marriage as the End of Comedy in *All's Well That Ends Well* and *Measure for Measure*." *Shakespeare's Personality*. Ed. Norman N. Holland, Sidney Homan, and Bernard J. Paris. California: University of California Press, 1989.
- Shakespeare, William. *Measure for Measure*. 1965. Ed. J. W. Lever, The Arden Shakespeare. London: Routledge, 1994.
- . *A Midsummer-Night's Dream*. Ed. Shonosuke Ishii. Tokyo: Taishukan Publishing Company, 1987.
- . *Twelfth Night*. 1975. Ed. J. M. Lothian and T. W. Craik, The Arden Shakespeare. London: Routledge, 1991.
- Watson, Robert N. "False Immortality in *Measure for Measure*: Comic Means, Tragic Ends." *Shakespeare Quarterly* Winter (1990): 411-31.